百合子賞　佳作　受賞作品

Reason to live

郡山ザベリオ学園中学校
遠　藤　由　椰

生きる意味とは、なんだろう?

十五年間生きてきても辿り着けないこの答え。いつかこの答えが出る日は来るのだろうか。思春期真っ盛りの学生なら誰でもぶち当たる壁なのかもしれないが、私は少し前から悩んでいる。また中三という時期もあり、進路という現実を目の当たりにしたために余計に悩むことが増えた。

ふと次の授業のことを思い出す。次の授業は……

「国語かよ。」

五時間目に最も不適切な教科だ。これはきっと眠くなってしまうだろう。眠くなったら隣の席の友人にでも起こしてもらおう。今のこの時期に態度を悪くして評定を下げるわけにはいくまい。六時間目は、数学で、放課後には……。どうやら我々中学生は多忙で生きる意味を考える余裕はない。答えのない問いを考えるのはよそう。はぁ、と大きく溜め息をつき、席に座った。

「今から……を配る。受験生だからって気を抜くなよ。」

ん?全然聞き取れない。

「眠そうな奴らがちらほらいるからもう一度だけ言ってやる。今から、夏休みの自由課題一覧表を配る。受験生だからって気を抜くなよ。」

はっ。そうだった。私は寝ていたのだ。どうやら眠りに落ちたのも気づかないくらい夢の世界へ入り込んでいたらしい。ふと窓に目をやる。さっきまでの雨は完全に止んだのだろう。白い雲をキャンバスに、蒼青とした空が描かれている。そこを走る灰色の絵筆のように、スーッと燕が空を駆けていった。

「せんせーい、いくらなんでも辛いでーす。」

「自由課題反対!過重労働だぞ!」

「こらこら、井上、林。きちんと話を聞け。お前らだけ課題二倍にするぞ。」

いじられ役の担任とバカコンビの会話。いつもの光景だ。それにしても……。自由課題か。長い夏になりそうだな。

自由課題といっても、何をやればいいのだろう。というか、全然自由な課題ではない。ほとんどが人権や税金や環境といった、中学生が身近に考えていないことばかりで、私からしたら制限課題に近いものなのだ。

「あっすー。どれにするか決めた?」

そう聞いてきたのは親友の彩織(さおり)。彩織とは小学校からの親友で、いつも一緒にいる。元気で爽やかな女の子だ。

「いや、全然。絵は上手くないし、作文を書くにもネタがないしなぁ。」

「そーこーで!私から提案がありまーす! うちのママがさ、回覧板でチラシ手に入れたらしいんだけど、なんか私達の地域で戦争について考えるためのプロジェクトやってるんだって。参加対象は私達みたいな学生みたい。だから、作文のネタになるかなーって。」

そう言って、彩織はプロジェクトの申込書を押しつけて来た。

「へえ……。ちなみにいつやるの?」

「八月八日から十五日までだって。一週間かけてやるらし……ってやば!そういや私これから委員会の集まりあるんだった!分からないことあったらメールしてね!」

「え、あ、ああ、うん。」

「あ、そうだ!前日に公民館で説明会あるらしいから、忘れずに来てよ!

それじゃ！」

「え、彩織、ちょっと待って……。」

虚しいことに声届かず。彩織は廊下の奥へと走り去って行った。

はてさて。これは困った。私は家で熟考していた。一週間かかるのは面倒臭いけど、作文のネタには出来そうだし……。ていうか、彩織、私まだオッケーとも言ってないんだけど。

「ま、とりあえず名前だけ書いとくか。」

公民館の申込書に、名村明日美と記した。明日美と書いてあすみ。この古臭い名前を、人生で私は一回も好きと思ったことがない。

八月七日、プロジェクト開催の前日。早速彩織と共に公民館へ向かった。

「みなさん、お集まりですか？これから説明会を始めますよ。」

公民館の館長さんらしき人が、順番にプリントを回してきた。

「みなさんには、戦争経験者の方とペアになって、一週間の中で話を聞いたり、この地域の被災地を訪れたりして、簡単な研修を受けてもらいます。最終日にレポートを書いてもらうので、そのこともきっちり頭に入れて、研修を受けて下さいね。」

館長さんの説明と簡単な諸連絡が終わると、事前説明会は解散となった。

「マジかー。」

帰り道、彩織がぼそっと呟いて、こう続けた。

「レポートも書くとは思ってなかったよ。これじゃ作文に追加でやること増えちゃうね。なんかごめん。」

「いいよ。作文のためと思って前向きにやろ。」

八月八日。いよいよプロジェクトが始まった。一旦公民館に集まり、ペアはくじ引きで決めるとのことだった。彩織は私より前に引き、大柄なおじいさんとペアになっていた。そして私。私は、えーと……。

「こんにちは。」

辺りを見回していると、先にペアの人が自分を見つけてくれた。

「桜木ヨシ、八十八歳です。どうぞよろしく。」

小柄なそのお婆さんは、私の手をそっと包むように握った。なんて温かい手だろう……。

「あ、申し遅れました。名村明日美、十五歳です。よろしくお願いします。」

慌てて自己紹介すると、桜木さんはうふふと笑った。

「そんな堅苦しくならないで。リラックスしてちょうだいね。」

そういうと、桜木さんは公民館の外へ向かって行った。歳の割にはとても元気なようで、しゃんしゃんと歩いて行く。私もその後ろをついて行った。

「まずは、私の家にいらっしゃい。戦争に関する本や資料がたくさんあるからいいわ。」

「そんな、急にお家に上がらせて頂くなんて、失礼になってしまいます。」

「良いの良いの。古臭いけど、意外と良い家なのよ。」

あっけらかんと笑う桜木さんの横顔を盗み見る。こんなにも明るい人が戦争を経験したなんて有り得ない。やはり乗り越えて生きているのだろうか。

「お邪魔します。」

ガラガラと引き戸を開けると、蚊取り線香の残り香がほんのり漂っていた。きっとさっきまで焚いていたのだろう。

「汚くてごめんなさいね。ちゃぶ台があるからその辺りに腰掛けて待ってて。」

言われた通り座ると家をぐるりと見渡した。天井に張り巡らされた梁が、この家の歴史を語る。障子を開けると木の板でできた縁側が私を出迎えた。ふと疑問に思って桜木さんに尋ねてみる。

「あの、桜木さん。この家って大体築何年になるんですか？」

「そうねぇ。この家は空襲でも奇跡的に焼かれなかったから、築九十年あたりかしら。私が生まれる前からあったもの。あ、あと桜木さんじゃなくてヨシさんの方が良いわ。距離が遠くなってしまうもの。」

「はい、ありがとうございます。」

「ねぇ、私最初から気になっていたんだけど、明日美ちゃんの名前って

どんな漢字なの？」
「明日に美しい、で明日美です。」
「良い名前ね。明日が美しい……。」
しみじみと言うヨシさんを見て、私は面食らってしまった。こんな古臭い名前のどこが良いのだろう。
「明日美ちゃん、一つお願い事しても良い？」
「お願い事、ですか？」
「そう……。私の代わりに、戦死した兄に手紙を書いてほしいの。」
「えーとそれは……。どういうことですか？」
ミーンミンミンミン。蝉の鳴き声は二人の会話を掻き消すかのように激しさを増した。
「私、毎年兄に手紙を書いているの。私が生きている今はどんな時代か伝えたくてね。返事は来ないけれど。でも、今年その役目をあなたにお願いしたいのよ。内容は何を書いてくれても構わないわ。」
「私なんかで良いんですか？」
「あなただから良いのよ。」
　帰り道、私はただひたすらに考えていた。少し考えさせて下さいと言ったものの、考えても答えが出ない。帰宅してすぐ、祖父にことの経緯を説明し相談すると、開口一番にこう言った。
「その話、受けなさい。」
「なんで？」
「こういうのはお前のような若者がやるべきことなんだ。それに明日美、お前もこの話を受けて良かったって必ず思う。じいちゃんの助言を無駄にするんじゃないぞ。」
まだ納得し切れてはいなかったが、祖父からの助言もあり、手紙を書くことを決意した。
　次の日からはヨシさんの家に直接行くことになった。呼び鈴を鳴らすと、ヨシさんが笑顔で戸を開けてくれた。
「明日美ちゃんいらっしゃい。さ、上がって上がって。」
居間に着くなり、私は言った。
「ヨシさん、私、手紙書きます。上手く書けるかは分からないけど。」
「良いのよ。でもまさか本当に書いてくれるなんて、信じられないわ。」
「私、手紙を書くにあたって知りたいんです。ヨシさんのお兄さんのこと。戦争のこと。」
「分かったわ……。ちょっとついてらっしゃい。あなたに来てほしい場所があるの。」
ヨシさんの家を出てから十分。上り坂を登った先に、大きな桜の木がある公園の広場に来た。ヨシさんは木の下にレジャーシートを引き、麦茶のペットボトルを手渡す。
「少し長い話になってしまうから、水分不足にならないようにね。」
パキリ。私がペットボトルの蓋を開けると、ヨシさんは話し始めた。
「そう、あれは私が九歳の頃だった……。」
　一九四三年、私はあなた達と同じように、学校に通っていた。でもその頃は、日本の戦況が極度に悪化していたから、勉強なんてやっている場合ではなかった。来る日も来る日も軍国教育を受けさせられ、体育の授業ではお国のためにと訓練に明け暮れていたわ。それでも、誰にでも楽しみはあった。私の楽しみは、十歳年上の兄と話すこと。実はね、私の初恋の人は兄だったのよ。こうして言うと何か恥ずかしいわね。兄はとても優しい人だった。
「ほらヨシ、見てごらん。二十色の折り紙だよ。近所のおじさんがくれたんだ。」
「うわあ！綺麗！お兄ちゃんありがとう！」
当時は今のようにゲーム機なんてなかったから、女の子はまりつきや折り紙をして遊んでいたわ。それでも戦時色が濃くなればなるほど、そういう遊びが制限されていったのよ。そんな中でも私達家族は普通に暮らしていたわ……あの紙が来るまでは。
「桜木隆さんですね。おめでとうございます。召集令状です。」
戦況が悪化していた当時、学生も戦地へ向かう学徒出陣ということが行

われていたのよ。戦地へ行くことを知らせる令状、通称赤紙がとうとう兄の元へ届いたの。母がお祝いにと夕飯に赤飯を炊いてくれたわ。誰も心の中では祝ったりしていないのに。でも、悲しんでいる暇はなかった。その日の夜、この町は空襲の被害を受けたのよ。

「空襲だ！頭巾被って外出るぞ！」

父の叫び声と共に、家族全員家を飛び出した。向かう先は坂の上の避難所。家には防空壕を作れなかったから、ここへ行くしかなかった。みんな必死で逃げたけど、私と兄は両親と弟とはぐれてしまったの。避難所までの道は父しか知らなかったから、私はパニックになってしまった。でも兄は冷静に私の手を引っ張って一言、

「おいで。」

と言ってこの桜の木の下に連れて行った。

「ヨシ、もう大丈夫だ。この桜の木が俺達を守ってくれる。」

桜の木の下に目をやると、私達の街が火に襲われていたわ。

ああ、何もかもなくなっていく……。

呆然と立ち尽くす私を見兼ねて、兄はこう言ったの。

「なあヨシ、一回桜の木の下に立ってみてくれないか。」

私は何がなんだか分からないけど、桜の木の下に立った。すると兄は軍服のポケットからカメラを取り出して写真を撮った。その時、風がひゅうっと吹いて、桜の花びらが夜空に舞って……そう、この時は春だったのよ。兄はカメラのレンズから私を覗いて一言、

「綺麗だ……」

と呟いた。私がどんなに嬉しかったか。兄は少し間を置いてこう言った。

「ヨシ、お前はなぜ自分の名がヨシか、知っているか。」

私は首を横に振った。

「人生でたくさん良いことがあるようにって願いを込められて付けられたんだ。父さんと母さんと兄ちゃんで、希望を持って付けた名前なんだ。これからヨシの人生は幸福で溢れているに違いない。だが兄ちゃんはそこにいないかもしれない。けど自分を信じて、貫き通して生きていってくれ。これが兄ちゃんの一番の望みだ。」

「やめてよお兄ちゃん。お兄ちゃんは戦争が終わった後も家族みんなと幸せに暮らすの。お別れみたいなこと言わないで。」

「俺は戦地で立派に戦って、自分の使命を果たして来る。だから、ヨシ、お前も自分の使命を全うして生きろ。約束だ。」

「……うん。」

私は兄と指切りげんまんをした。兄の手は訓練でボロボロだったけど、優しくて温かかった。あの温もりは、とても忘れられないわ。

二日ほど経った後、私の家は焼けなかったから、兄は予定通り家を発った。私達家族と近所の人達に盛大に送られて戦地へと旅立って行ったわ。私はその時背が小さくてはっきりとは見えなかったけれど……。兄は最後に振り返り、口だけを動かしてきっと私にこう伝えたんだと思う。

「生きろ」

「ちょっと明日美ちゃん、大丈夫？」

ヨシさんの声で我に返る。頬にそっと手を触れてみると、幾つもの雫が流れて来ていた。――あれ、私もしかして、泣いてる？

「辛い話しちゃってごめんなさいね。はい、ハンカチ。」

「すみません。でも良いお話聞けました。ありがとうございます。」

「私、あの時の兄の言葉があったからここまで生きて来られたんだと思う。兄には感謝しなくちゃね。」

今日はここまでにしましょ、とヨシさんが私を気遣って切り上げてくれた。

　三日目から六日目までは、ヨシさんの家にある資料を読んだり、防空壕の跡地に連れて行ってもらったりした。七日目はレポートをまとめる日で、もうペアの方とは関わらないので、六日目が終わるとヨシさんにお礼を言った。

「ヨシさん、短い間でしたがありがとうございました。本当にためになるお話ばかりでした。お兄さんの話も、この街の歴史も……とても良い経験になりました。」

「やだ、もうそんなに畏まらないでよ。私は私の話せることを話しただけ。こちらこそ、若い人に伝えるきっかけを作ってもらってとても感謝だわ。」
「あの、最後になぜ私に手紙を書いて欲しかったのか教えて頂いても良いですか。自分で考えていても、全然分からなくて……。」
「ああ。それはね、何となく重なったからよ。兄の面影と。」
ヨシさんはそう言った後、こう続けた。
「あなたの顔を最初に見た時、あなたと最初に話した時から、どこか懐かしい感じがしていたのよ。その後初めてあなたの笑顔を見て……。なんて綺麗で優しい笑顔なんだろうって思った。それと同時に気づいたのよ。もう一人そんな笑顔を見せる人がいたってことに。それが自分の兄だったってことに。私は雷に打たれたような衝撃を受けたわ。」
「そうなんですか……。」
「そしてこう強く思った。この二人が出会っていれば良かったのにって。ごめんなさい、勝手な理由で。」
私と似ていたんだ……。私もまたその事実にただ驚いていた。
「戦争のことは忘れないでほしい。でも、心に引きずりすぎるのもいけないわ。だから、このことを心に留めながらも、あなたは幸せな人生を歩んでいってね。」
「はい。」
私を見送るヨシさんの背中は少し寂しげだったが、背負っていたものが軽くなったようにすっきりしたように見えた。
　七日目、八月十五日。レポートを書き終えると、彩織と第一小の旧校舎へ赴いた。第一小の旧校舎にはオレンジ色のポストがある。そのポストは、届けたい人へ必ず手紙が届くポストとして有名だ。私は戦前からあるこの旧校舎で、雰囲気を感じながら手紙を書き、ポストへ投函したいと思った。一人で行く予定だったが、彩織が私の手紙を読みたいと言うので、一緒に行くことになった。教室へと入って、窓辺の席に座る。彩織もこの七日間のことを話してくれた。彩織とペアだったおじいさんは戦争に行き生還した数少ない一人だったらしく、左腕が爆撃で義手になっていたという。
「やっぱり戦争で生きて帰って来るのも辛かったって。毎日悪夢にうなされたらしいよ。」
戦死しても地獄、生き残っても地獄。果たしてこの時代の軍人達に救いはあったのだろうか。
「ねぇ、彩織。私さ、最初にヨシさんを見た時、とても明るい人だから、戦争を乗り越えて生きているのかと思ってた。でも、違う。乗り越えられる訳ないんだ。乗り越えられなくても毎日生きていくしかないんだ。生きて生きて、前へ進むしかないんだ。今を生きる私達は、恵まれてるね。」
「そっか。今を生きる私達は、恵まれてるね。」
「そうだね。」
夕暮れの刻を知らせる鐘が鳴る。茜色の夕陽が古びれた窓に反射して光を映し出し、私達のことをただ見守っていた。
「書けた。」
　拝啓
　　未だに蝉時雨が続いており、夏の厳しい暑さが残りますが、お変わりありませんか。
　私は名村明日美、十五歳です。先日桜木様の妹さん、ヨシさんより戦時中の話を伺いました。戦時中は厳しい生活で、残酷なことがたくさんあると聞いていましたが、遥かに想像以上でした。特にヨシさんから聞いた空襲の話は心に残っています。
　今、私が生きる時代は平和……ではありません。日本では戦争をしていませんが、世界の各地で紛争が起こっています。戦争の恐ろしさを学んだはずなのに。人類全員が手を取り合う日はいつ訪れるのでしょうか。
　私はヨシさんから桜木様のお話も伺いました。あの時桜木様がヨシさんに伝えた言葉、「自分の使命を全うして生きろ」という言葉は私の胸を強く打ちました。今までずっと自分の「使命」を疑問に思いながらも、逃げ続けていた私。でも、この言葉をきっかけに、全力で捜しに行きま

す。そうすれば、きっと人生も前を向くはず。この冒険が終わるまで見守っていて下さい。

　末筆ながら、ご自愛のほどお祈り申し上げます。

敬具

令和四年八月十五日

名村明日美

桜木隆様

　手紙をオレンジ色のポストに入れる。手紙を書けたという達成感から、思わず大きな溜め息が漏れた。

「あっすー、この一週間で変わったね。」

「え？」

「何かこう、生き生きしてるっていうか。」

「えーちょっと。それっていつも私がやる気ないみたいじゃない。」

「あはは。ごめんごめん。でもぶっちゃけやる気ないって時多いじゃん。」

「言ったなこのー。」

確かに私は変わったと思う。でもそれは私が変わったんじゃなくて、桜木さんとヨシさんという二人の人物が変えてくれたのだ。

　生きる意味、とはなんだろう。この問いの答えは永遠に見つからないかもしれない。時と共に変わって行くかもしれない。それでも私は探し続けて行く。限りある時間の中で。この命の灯が消える、その瞬間まで。

（指導教諭／和田山　琴　子）

《作品の意図》

「なぜ、生きているんだろう。」「何のために生きているんだろう。」こういった問いは、人生の中で必ず考えるはずです。特に、思春期の中高生は自らの進む道に迷い、この問いを考えることが多いでしょう。しかし、時代が違えば自分の進む道を決められてしまうことがあります。自由に生きる道が与えられている私達は、どれだけ幸せなのか。戦争のあった時代を経て、私達はどのように生きていくべきなのか。そういったことを考えて読んで頂けると幸いです。

《作品の寸評》

　冒頭「生きる意味とは、なんだろう？」で始まり、終末で再び「生きる意味とはなんだろう。」と述べ、「この問いの答えは永遠に見つからないかもしれない。～略～それでも私は探し続けて行く。」と作品を終わらせている。また、作中、「乗り越えられなくても毎日生きていくしかないんだ。生きて生きて、前へ進むしかないんだ。」と、名村明日美に語らせている。作品を通してテーマが一貫していた点を高く評価したい。

　夏休みの地域プロジェクトで出会った桜木ヨシさんから、戦死した兄へ手紙を書いてほしいと依頼されるのだが、桜木隆へ宛てて書いた手紙文が、作品にアクセントを与えている。

　全体的に、わかりやすい構成と素直な表現で、好感が持てる。

（審査員／宗　形　幸　子）